

生成の起点にある質料はまだ生成のプロセスに入っていないので受動的な能力をもっていると言えるが、生成のプロセスのうちにある、あるいは生成物を構成している質料は当の生成物へと作られるという受動的な能力はもっていないということに気づく。こうしてアリストテレスが第9巻第6章において質料という意味での可能的なものと言っていたのは後者の意味での質料であるという解釈が可能となる。

以上によって、第9巻第6章における「可能的なもの」に、能力をもっているものというのとは異なるもの、すなわち質料という意味があるということ、さらにこの場合の質料が、『自然学』のテキストから読みとれる、形而上学的に要請された原理的なものであるということが明らかになった。

平成16年

◎ 6月23日

イギリス中世都市の衰退と繁栄 ——都市と近代の形成——

坂 巻 清

中世都市が近代の形成にどのようにかかわったのかについては、古くから種々の議論があった。我が国では大塚久雄氏が、中世都市は「前期的資本」の拠点であり、農村から発生する近代資本主義を抑圧するものとして否定的に捉えたのに対し、増田四郎氏は中世都市の市民と近代の市民とを連続的に捉え、中世都市の近代社会形成に対する積極的なかわりを主張している。またヨーロッパでも、古くはドイツ歴史学派やM.ウェーバーから、最近のF.ブローデルやE.A.リグリーの「寄生的」か「成長刺激的」かの議論にいたるまで、長い議論の展開がある。

私見によれば、中世都市と近代のかかわりを、

イギリス中世都市について検討しようとする時、まず中世末期から近世にかけて地方中世都市の衰退が顕著である一方、首都ロンドンなどの繁栄が著しく、その対照がヨーロッパ大陸の都市に比べて、際だっていたことに注目せねばならない。そしてこのことは、イギリスの中世都市が政治的軍事的性格が弱く、経済的性格が強いというその特殊性の故に、都市相互間、都市と農村間、そして都市内部のギルドにおいて、経済的競争関係が生じやすかったという事情に由来していたとみられる。この結果、イギリスでは14世紀後半から16世紀半ばにかけて、まず小都市の衰退が進み、ついで中都市そして大都市へと地方中世都市の衰退が広がったのに対し、ただロンドンのみが一貫して発展をとげる傾向がみられた。特に1520年代から70年代にかけての「都市危機の時代」には、ロンドンと若干の市場町が発展したほかは、ほとんどの地方都市が衰退した。これはロンドンが当時世界市場の中心となったアントワープと結合して発展し、イギリスの毛織物輸出の90%ほどを掌握したことを有力要因としていた。そして、これに伴うロンドンへの経済集中こそが、地方都市の経済圏を破壊し、ロンドンによる地方・農村の全国的規模での掌握と、国民経済の形成をもたらしたのであった。

その後、「ロンドン＝アントワープ枢軸」の崩壊とともに、16世紀末からいくつかの地方中世都市が復活・繁栄してくるが、これらの都市はギルドを改編して仕上・流通の中心地となり農村工業と結合していた。また発展した市場町も農村工業の凝集点から、仕上と流通の中心地となっていた。こうして1700年頃をとってみると、首都ロndonは、ノリッジ、エクセターなどのいくつかの中世都市と、リーズ、トロウブリッジなどの市場町を介して農村に結合し、都市と農村が全国的に結合する体制となっていた。しかもこの年にはロンドンがヨーロッパ世界最大の人口をもち、それ

が同じく最強の農村工業と結合していたのである。こうした都市・農村の全国的結合体制の下で、18世紀には地方都市はそれぞれ産業が特化する傾向がみられ、織物工業都市、金属産業都市、造船都市、港湾都市、保養都市等々が出現したが、これは国民経済の充実を意味し、ロンドンが地方都市の専門化に対して、それらを総括しつつ「万華鏡」のように多様な側面をもつ存在となっていた。

ロンドンを中心として都市と農村が、16世紀半ば以来全国的規模で結合していたことがイギリスの特徴であり、それによって、イギリスは他の諸国との重商主義的競争に勝利し、18世紀末には産業革命を生み出した。従って、イギリス中世都市は、その衰退と繁栄を通して、近代の形成に積極的にかかわったのである。

平成16年

◎ 6月23日

〈時間の経過〉という文法と物語

藤井貞和

「物語」という語は日本古語であり、同時に(narrative《英》などの)翻訳語として、現代社会に生きつづける。古代には叙事文学を、ものがたり(本来は談話の意味)のほかに、こと、ふること、ことのもと、などと言い、けっして一枚岩でなかった。今日はこの、こと、ふことに注目するのである。「こと」は言(こと)、事(こと)、そして説話、叙事をも、うえに言うように「こと」と称した。

話が飛ぶようながら、ドイツ人伝道師ギュツラフが、ヨハネ伝の冒頭部を「ハジマリニカシコイモノゴザル」と日本語にした。日本人漂流民たちとの、苦心の共同作業である。その作業はマカオで行われ、シンガポールで木版となった。積み荷には間に合わなかったものの、一八三七年、米船

モリソン号が漂流民たちを日本へ送り届けようという国際性である。徳川政府は狭い根性から来船を砲撃で追い払った。

また話が飛ぶごとくだが、ジアンバティスタ・ヴィーコの著書の邦訳(一九四六年)に『新科学』(黒田正利訳)があり、ロゴスを「物語」とする。ギュツラフに「カシコイモノ」とある、ロゴスという語が、「物語」であるとする説明は、私にとりまさに突破口だ。日本語の「こと」の含意は古いギリシア語でのロゴスに相当するのではないかと思ひ当たる。

ところで山形孝夫氏の論文が示唆してくれたことによると、フランス語で言えば半過去に相当するところの、未完了過去で古典ギリシア語はヨハネ伝の冒頭部を叙述している。私はこれまで、自分の論著で、「ふること」が助動詞「き」で語られ、物語は同「けり」で語られることについて述べてきた。「き」は古典ギリシア語でいうならアオリスト(言ってみるなら単純過去)、「けり」は未完了過去に相当する。つまり現代に行われる「太初(はじめ)に言(ことば)ありき」(文語訳)や、「初めに言(ことば)があった」というのは、誤りであるか、あるいは曖昧であるかで、厳密には「言(ことば)ありけり」、またはギュツラフのように「ゴザル」と現在形にしてしまうほうが、「あった」よりは正しい。「けり」は時間の経過(あったことがいまにある)をあらわす、つまり過去から現在へと流れいる時間を表現する。

日本古典語による叙事の基本は非過去ないし現在時制であり、その現在という時間のなかへ、「けり」と「き」との区別をはじめとして、「つ」「ぬ」「たり」「り」など、時間関係の助動詞が豊富にはいりこんで、絶妙な時間の差異をあらわしてのける。その表現性が、近代の文章改良運動である、言文一致にもとづく、「た」「た」「た」「た」という文体になることによって、うしなわれていった。